

スポーツ分野において海外の現場で順応する人材の資質・能力
に関する一考察
：ドイツにおける日本人サッカーコーチの活動事例を活用して

坂尾 美穂¹⁾

**Investigating the qualities and skills required for human resources
to adapt in the sports field abroad based on the case study of
Japanese soccer coaches in Germany**

Miho SAKAO

Abstract

The aims of this research were to examine the qualities and skills required for human resources to adapt in the sports field abroad, and to accumulate basic data on this topic. And data are also objective qualitative data. The present study used the activities of Japanese soccer coaches in Germany as a reference, and involved a survey consisting of a questionnaire and an additional interview, if necessary. The respondents were soccer coaches and German language teachers based in Germany and know of the activities of Japanese coaches of this case study. The answers were classified into three categories: action, attitude, and skills. As a result, I was able to get concrete item: not only “German language skills ” and “open” , but also “asking” , “ability to let be carry out” , and “authority” ; therefore, I was able to obtain key suggestion into the qualities and skills required for human resources to adapt in the sports field abroad in practice.

Key words : adapting abroad, soccer, coaching in Germany, communication ability, human resource development in the international community

キーワード：外国での順応，サッカー，ドイツでのコーチング，コミュニケーション能力，国際社会における人材育成

1) スポーツ学部

1. 緒言

1.1 国際社会で活躍する人材育成

内閣府が発行している令和3年度版 子供・若者白書（全体版）において、「グローバル社会で活躍する人材の育成」について記述されている。その内容には、「国際社会で活躍する日本人の育成を図るためには、我が国や郷土の伝統・文化を受け止め、その良さを継承・発展させるための教育を充実させることが必要である」（文部科学省）、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」（文部科学省）との記載がある。令和2年度文部科学白書によると、「スポーツ立国の実現」の章において、「国際競技力向上に向けた強力で持続可能な人材育成や環境整備」についての取り組みが述べられ、「国際交流・協力の推進」の章においては、「国際社会で活躍できる人材の育成や、海外の優秀な学生及び研究者の戦略的な受け入れによる双方向の人的交流の推進」についての施策が述べられている。

国際社会で活躍するには、コミュニケーションツールとしての外国語スキルだけではなく、ディスカッションやディベートといった双方向の意見・情報交換と自身の立ち位置（意見）を明確にした中で主張する力、意見・情報交換や論議を尽くした先に妥協点を定める力といったコミュニケーション能力も求められる。更にそこに、文化や宗教といった個人や団体による多様な背景的要素が含まれ、これについても考慮することが求められる。これらは、国内外問わず、国際社会を経験した者ならば、経験的に感じることだろう。前述した令和3年度版子供・若者白書の記載のように、相手に合わせ委ねる姿勢だけではなく、我が国固有の伝統や文化、脈々と培われ

てきた良さを発揮し、国際社会で活躍するための一つの材料に変えていくことも有用であり、不可欠でなければならない。

国内のスポーツを統括する団体では、公益財団法人日本オリンピック委員会（以下、JOC）は、その役割を「アスリートの育成・強化」、「国際総合競技大会の派遣・招致並びに国際化の推進」「オリンピズムの普及・推進」の3つに定め、「選手強化」「アスリート支援」「オリンピック・ムーブメント推進」「国際連携」「自律・自立」の5つの活動を行っている。また、選手強化の一環として、指導者を海外に派遣し、「将来我が国のスポーツ界を担う指導者育成」を行っている（公益財団法人日本オリンピック委員，2021）。公益財団法人日本サッカー協会（以下、JFA）は、アジアサッカーの普及・発展につなげることを目的に、46の国と地域が加盟するアジアサッカー連盟（以下、AFC）のモデル協会として、AFC加盟協会に対する様々な支援策を実施している。その一環として、JFA公認指導者を海外に派遣し、2021年8月現在、21名の指導者が活動を行っている（公益財団法人日本サッカー協会，2021）。スポーツの領域において、すでに早い時期に国際化に関する諸施策は始まっている。近年、国際化へ向けたスピードは更に拍車をかけて速まっているのではないだろうか。そして諸施策の対象となるのは、競技会やそれに出場する選手にとどまらず、コーチやチームスタッフ、大会運営を担う人材と多岐にわたる。

1.2 コーチング現場における実践研究

朝岡（2011）は、アメリカ、そしてドイツを中心としたヨーロッパの「指導に関する理論」の発展をたどることによって、実践に役立つ「指導に関する理論」を再構築するための提言を行い、我が国における動向との比較についても論じている。その中で、演繹的理論構築と帰納的理論構築について言及しながらコーチング学の今日的な課題について述べ

ている。筆者も、ドイツでドイツサッカー協会公認（以下、DFB）コーチングライセンスを取得した際に、その講義内において、「演繹的」「帰納的」指導についてインストラクターが講義していることについて非常に印象的に記憶している。村木（2016）は、コーチング学の形成と発展・将来展望をまとめた中で、「実践系理論での現場（フィールド）なき理論は存在し得ない」とし、コーチング学会として「理論と実践」「個別と一般」を繋ぐハブ的役割が重視されると述べている。山本（2018）は、体育・スポーツ分野における実践研究の必要性とあり方を述べる中で、現場のコーチや選手でも身近な材料から研究を世に出す実践研究独自のパラダイムを紹介している。

コーチング現場でコーチング活動を実践している指導者らが、その実践や経験から得た何らかの知見をまとめ残していく作業は、たとえそれが一般化された理論の構築には至らないとしても、将来のコーチング現場での効果的な指導につながり、ひいてはよりよい人材育成、競技力向上に寄与することになる。

1.3 海外／国際関連に関する研究等

中道（2012）は、女子車いすバスケットボール選手の生活観の国際比較として8つの設問を行い、日本の選手と海外の選手の共通点と違いを示した。その結果、競技者・女性としての生活観はすべての国で共通していることを示した。西条ら（2021）は、スポーツ大学によるグローバル人材育成のあり方という点において、オーストラリアにおけるスポーツ留学の実際と課題・効果についてまとめ、スポーツ分野に特化した外国語教育の方法について考察している。その中で、「海外体験が生きてくるのは、留学後の長い人生においてである」と述べている。坂尾（2017）は、JOC スポーツ指導者海外研修事業帰国者報告で、当時 FIFA ランキング男女ともに1-2位であったドイツの強さの背景と日本女子

サッカーが今後も世界基準を維持するために必要なことを考察し、論理的思考に基づくパーソナリティと物事の進め方、論拠に基づいたストラクチャー、必要性があるときの変化の早さを挙げている。

既に述べたように、現代社会そして将来を見通しても、国際社会で活躍する人材育成は必須であり、スポーツ界においても同様である。内山（1990）は、日米の事例を紹介しながら「コーチ」の資格と基準及びその条件、そして資質についての基礎的資料を提示する中で、「基本的にコーチが対象者を健全な方向へと導く役割を担っていることは当然のことといえる」と述べている。筆者は、国際社会で活躍する人材育成にスポーツは大きく寄与し、その育成場面において、選手が経験するであろう大会参加や交流機会といった環境整備のみならず、選手育成活動そのものにおいてコーチは非常に大きな担い手であると感じている。そして、そのコーチ自身が国際社会で活躍できるだけの能力と基準を持っていること、少なくとも国際社会で活躍するためのグローバルマインドを有していることが重要である。しかし、コーチ自身の学びにつながる海外での事例研究、資料はあまり多くはないのではないだろうか。

2. 本研究の目的と意義

本研究はコーチの学びに役立つ事例研究の一環として行う中で、スポーツ分野において海外の現場で順応する人材の資質・能力に関する質的調査および考察を進め、基礎的資料の蓄積を図ることを目的とする。日本人女性サッカーコーチが2014年から2017年初めの期間に経験した、ドイツでの活動を対象事例として活用し、この活動について、当時を知る現地のサッカーコーチおよびドイツ語教師に協力を仰ぎ、日本人に対する見解について4つの質問をする。対象事例の当事者（コーチング主体者、以下主体者）である日本人の視点ではなく、現地人（日本人にとっては外

国人)^{注1)}からの観察者の視点を質的データとして取り扱うことに貴重性があり、「海外の現場で順応する人材の資質・能力」についての視座を得るためのデータとなり得る。活用した事例は、主体者が、ドイツのサッカークラブにおいて研修コーチ^{注2)}からコーチング活動が始まり、最終的には契約書を結ぶ有給コーチとなった活動期間を中心に扱うものであり、程度の違いを省けば、ある程度、海外で順応した一事例と考えることができる。

3. 本研究報告で考慮する点

本研究報告では、以下、2つの点について考慮して読み進めていただきたい。

一点目は、アンケート回答者に対して、「広く日本人全体の特性について」を前提に質問し、それに対する回答を取り扱っている、という点である。しかし、アンケート回答者のいずれもコーチング主体者を知っており、主体者の現地での活動時に定期的に接触があったこと、そしてアンケート回答者が知りうる日本人サッカーコーチはごく少数または主体者のみであることから、回答内容に主体者に関する印象、主体者の現地での活動等が少なからず影響していると考え、主体者の情報も明らかにしている。

二点目は、アンケート回答者に現地のサッカーコーチとドイツ語教師を採用した点である。下記4.3に示す通り、現地のサッカーコーチはサッカーコーチングライセンスを保持しており、サッカーの競技現場も踏まえて、専門性を持った視点からの回答を得ることができる。他方、ドイツ語教師は、サッカーあるいはスポーツについての専門性が乏しいという点は否めないが、本研究報告では「スポーツ分野において現場で順応する人材の資質・能力」に関して基礎的資料の蓄積を図ることを目的としている。緒言でも述べたように、国際化へ向けた諸施策の対象となるのは、競技会やそれに出場する選手にとどまらず、

コーチやチームスタッフ、大会運営を担う人材と多岐にわたり、そのどの分野の人材も、コミュニケーションツールとしての外国語スキルは必要項目であることから、言語教師にも回答を求めた。無論、本研究で言及しており、コミュニケーション能力は外国語スキルのみで測れるものではないが、「海外で順応する人材の資質・能力」という点においては省くことのできない項目であると予想している。また、「順応する」ということは、つまり特定されたある場面（例えばサッカーの指導現場）のみならず、コミュニティや日常生活における順応も関連すると考えたため、専門性を持ったサッカーコーチからのアンケート回答にとどまらず、一般社会からのアンケート回答という視点も有するだろうとの考えも含め、ドイツ語教師のアンケート回答を採用した。

結果および考察を読み進めるにあたり、サッカーコーチのみの回答、ドイツ語教師のみの回答、その両者に共通する回答という観点をもって、「海外で順応する人材の資質・能力」についての示唆を得ることを期待している。

4. 方法

4.1 アンケート実施の方法

Google社のサービスの一つであるGoogle Formを使用し、自由回答式アンケート調査を実施した。更に、アンケート回答において不明な点について、メールまたはインタビュー形式にて、必要に応じて追加で質問し回答を求めた。

アンケート調査は、2021年8月1日～9月30日にかけて実施した。

なお、回答者には、本研究の趣旨を事前に説明し、研究協力への同意を得た。調査に先立ち、調査で得られたすべてのデータは、本人の事前承認なしに回答者が特定できる状態で使用しないこと、アンケート及びインタビュー回答者は、いつでもこの件に関して質

問でき、いつでも自由にこの同意を撤回し、研究への参加協力を中止する権利を有することを説明した。また、インタビュー調査では、オンライン無料通話コミュニケーションツール Skype を使用し、事前に了解を得たうえでインタビュー内容を録画した。

4.2 調査内容

「広く日本人全体」についての質問であることを前提として、「詳しく」「根拠づけて」回答するように求めたうえで、表1にあげる4つの質問をした。

表1. 質問項目

質問1	Welche Fähigkeiten müssen Japaner haben, bzw. entwickeln, um sich in Deutschland schneller anzupassen?	日本人はどういった能力を持っている必要があるか、あるいは、ドイツでできるだけ速く順応するために開発（成長）するべきか？
質問2	Welche Charaktereigenschaften haben Japaner?	日本人はどういった性格上の性質（特性）を持っているか？
質問3	Welche Eigenschaften/Fähigkeiten muss ein japanischer Fußballtrainer/rin in Deutschland haben?	どういった性質（特性）／能力を日本人サッカーコーチはドイツにおいて持っている必要があるか？
質問4	Welche Kenntnisse über Fußball muss ein japanischer Fußballtrainer/rin in Deutschland haben?	どういったサッカーに関する知識を日本人サッカーコーチはドイツにおいて持っている必要があるか？

4.3 アンケート回答者

現地のサッカーコーチ（以下、コーチ）2名およびドイツ語教師（以下、教師）2名に回答を得た。回答者4名は、ヨーロッパの国の国籍を有し、生活の拠点がドイツにある。

コーチはいずれもヨーロッパサッカー連盟、（以下UEFA）のサッカーコーチライセンス保持者（UEFA-B級以上）である。両者の日本人知人は2名以下であった。教師はいずれもドイツ語教師を本業として行っている。平均33年以上の業務経験を有しており、両者の日本人知人は30人以上であった。

4.4 調査結果の分析

自由回答式によって得られた文章データを切片化しキーワードをまとめた。そして、そこで得たキーワードを「行動」「心構え・パーソナリティ（個性・人格的要素）」「技能」に分類した。

またドイツ語を日本語に訳すため、便宜上、筆者が補足した日本語は〔 〕を使用し、辞書から引いた日本語訳でひとつの単語に特定せず複数を記載した方がよいと判断した単語は（ ）を使用して記載した。

5. 活用した活動事例におけるコーチング主体者の情報

渡独以前に10年以上のコーチ経験があり、小学生から大学生までのすべての年代での指導経験があった。その際のコーチング対象のほとんどは女子であった。

JFA公認ライセンスを保有し、JFA専任契約によるコーチ経験を有していた。海外経験は、数度にわたりチームや選手の海外遠征にコーチとして帯同したほか、国際的なコーチングコースへの数回の参加経験も有していた。

言語スキルに関しては、週1回50分程度の英会話レッスン受講経験が多少あり、ドイツ語に関しては、オンラインレッスンを渡独前10回受講した程度で、まったく理解できないレベルにあった。渡独後のドイツ語スキルの変遷を、資料として表2に示す。

また、主体者は、渡独前に過去にドイツ在住経験のあったサッカーコーチに現地での活動におけるアドバイスを求めた際、現地の日本人・日本人社会になるべく頼らず（接触せず、日本人コミュニティに浸からず）、現地人が構成する社会の中で四苦八苦しながらも

生活を送り、活動を進めていく方がよいというアドバイスを得ていた。主体者は、サッカーコーチの経験上、その発言の趣旨や実行から得られる効果を実感的に理解し、海外に在住することで特別に起こりうる課題や問題点を含め、できるだけ日本人に頼らず課題解決するよう心掛けていた^{注3)}。

ドイツでの活動期間は2014年5月～2017年2月(サッカーチームでのコーチング活動は2014年7月～2016年10月まで)であった。2014年5月10-11日に渡独後、ドイツ成人女

子3部リーグ(地域リーグレベル)に所属するチームでアシスタントコーチと同クラブ内で女子1部リーグ(女子ブンデスリーガ1部)に所属するチームで研修コーチ、同クラブ内で女子U-17リーグ3部(県リーグ相当)に所属するU-16女子チームで監督としてコーチ活動を行っていた。

本研究のアンケート回答者は、主体者の現地での活動期間内にある程度頻繁に、あるいは定期的に主体者と接触を持つ立場・環境にあった。

表2. コーチング主体者のドイツ語スキル獲得の変遷(渡独後)

コース受講開始	コース受講終了	ドイツ語レベル	検定試験	コース受講頻度
2014.5.12		A0-A1	受験せず(ドイツ語コース受講のみ)	週5回
2014.6.30	2014.8.22	A2	受験せず(ドイツ語コース受講のみ)	週5回
	2014.12.15	A2-B1	A2 検定合格	週0回/週2回
	2015.2.2	B1 (-B2)	B1 検定合格	週0回/週2回
	2017.2.15	B2	B2 検定合格	週0回/週2回/週5回

6. 結果および考察

結果について、切片化しキーワード化したすべての項目を記し、「行動」「心構え・パーソナリティ(個性・人格的要素)」「技能」に分類した(表3～6)。その際、コーチと教師の回答も分けて記載し、考察する。

6.1 日本人が持ちうるべき能力/順応するために開発すべき能力

回答を表3にまとめた。3つのキーワード(「行動」「心構え・パーソナリティ」「技能」)すべてに関する回答があった。3人(コーチ・教師)の回答に「オープンであること」、「ドイツ語の能力」に関する回答があった。また、もう1人コーチの回答にも「質問すること」との回答があり、「ドイツ語の能力」に関連するため、この回答者もドイツ語の能力に関して何らかの必要性を感じていることが読み取れる。その他、「技能」に関する回答で、教師の回答から、「日々の生活における知らせ(通知)を知る」「日常[生活]において

勝手がわかる」という項目があった。これらも「ドイツ語の能力」がその前提条件となると考えられる。

「行動」に関する回答には、「(自身の)興味を示すこと」「質問すること」との回答があり、いずれもコーチの回答であった。活動を行っていくためには、現地社会における日常[生活]の領域で順応するだけではなく、その国のサッカーの社会にも順応する必要がある。現地には日本人コミュニティもあり、日常[生活]を現地で営むだけであれば受動的な姿勢・態度・行動だけで解決する(生活すること自体では困らない)ことがほとんどであろうが、コーチ活動ではそうはいかない。現地サッカー社会の様々な仕組みや考え方、評価基準、優先順位、日本とは違う常識といったことを理解したうえで、能動的に行動していく必要がある。それらをまず知るためには、「質問する」という行為は非常に重要である。どの世界でも同じだろうが、海外においては顕著に「何がわからないのか」「何を知りたいのか」「何に困っているのか」「何をしたい

のか」「何故そこにいるのか（ドイツに来たのか）」について、現地人にわかってもらうためには、まず自身が能動的にこれらを発信する必要があります。日本国内との相違点や新しく見聞きすること、自身のこれまでの常識(生活の場面であれ、サッカーの場面であれ)と違う点があるのであれば、「質問して」解決し、「(自身の)興味を示し」自分がなぜそこにいるのかを周囲の現地人に理解してもらうほかなのである。そしてそれらなくして、他者と相互に関わり合いながら実践するコーチング活動は成り立たない。

「心構え・パーソナリティ」に関する回答

においては、コーチ・教師両者の回答の中に、「オープンであること」の他に「“失敗を犯す”ことに不安(恐れ)を持たないこと」「自信」という記述があった。これは6.2とも関連しているため、次項で考察する。その他には、「寛大さ(寛容さ・耐性)」があり、外国で活動する際に切っても切り離せない、文化や宗教といった個人や団体により様々な違いのある背景的要素や、言語レベル等によるコミュニケーションのつまずき、サッカー社会のみならず日常[生活]における種々多くの戸惑いや壁、遅々として進まない(前進しない)状況などに対応する能力である。

表3. 日本人が持ちうるべき能力/順応するために開発すべき能力(質問1)

質問1: サッカーコーチ	質問1: ドイツ語教師
開いた眼を持って暮らすこと	新しいことにオープンであること
オープンであること	オープンであること
	ドイツでの日々の生活における知らせ(通知)を知る
	日常[生活]において勝手がわかる
(自身の)興味を示すこと	
質問すること	
“失敗を犯す”ことに不安(恐れ)を持たないこと	自信
寛大さ(寛容さ・耐性)	人付き合いがよい
[外国]言語の知識	よくドイツ語を話せること、特に専門分野において
	ドイツ語の基本的な知識“レベルB1まで”

行動 心構え 技能

6.2 日本人のもつ性格上の性質(特性)

回答を表4にまとめた。2つのキーワード(「行動」「心構え・パーソナリティ」)に関する回答があった。

教師の1名がこの質問に答えた最初と最後の文章である。本項、最初に記載しておきたい。

『私の考えでは、日本人[としての]“国民(民族)[による]キャラクター(性格・特徴)”はない。慣れた、そして日本の典型的な行動

様式(ふるまい方・態度)はある、例えば…』

『しかし、あらゆる人はそれぞれ自分[自身]特有のキャラクター(性格・特徴)を持っている。それは国籍に依存(左右)されない。』

国籍や民族で語れる(分類する)ものではない、という大前提を明確に記載している。これは筆者の印象だが、国境が他国と接している大陸の中の国であるというその事実が、島国である日本の現況に比べ、多様性に富んだ社会を形成しやすい環境にあり、多様性社

会の中での順応がより求められるのではないか。その前提がこの回答につながっているのではないか。

回答者すべてが同様の内容を回答した。それが「控え目・謙虚・遠慮がち（謙遜・恭順・慎重な・思慮深い態度）」である。このパーソナリティが関連して起こる行動と考察できる回答が、「意見などを差し控える（感情などを抑える）」「調和（融合）欲求」である。コーチ・教師1名ずつが回答していた。6.1で考察した他者と相互に関わり合いながら実践するコーチング活動において、能動的に行動・発信していくことが重要との視点に立つと、これらのパーソナリティが過度に表出するとマイナスに働くことが予想される。一方で、コーチ2名が回答した「丁重（敬意のこもった）」「誠実（公正・忠誠）」「親切（好意）」といった項目は、他者とコミュニケーションを円滑に図るために発揮されるものであり、日本人の持つ生活上の性質（特性）において

長所として機能すると予想する。

その他で興味深い回答が、コーチ・教師のそれぞれ1名ずつが回答した、「野心（功名心・名誉欲）」という回答であった。日本語に訳す過程において、日本人としての筆者の感覚では、日本では必ずしもポジティブには捉えられないワードであると感じたため、教師1名に追加で質問した。その回答の中で例に上がった言葉は、ウィリアム・スミス・クラーク氏の「Boys, be ambitious」の「ambitious」であった。回答者は「健康的な野心」とも表現し、追加インタビューの中では「目標達成への気持ち」と「目標達成に向けて働く（勉強すること）」と表現していた。コーチの1名の、「学ぶことを喜ぶ」との回答や教師1名の「とても勤勉」、コーチ・教師それぞれ1名ずつの回答「規律（秩序）」とも関連させると、これらも日本人が持つ長所となりうるパーソナリティであろう。その他にも「時間的正確さ（時間を守ること）」や「信頼性（確

表4. 日本人のもつ性格上の性質（特性）（質問2）

質問2：サッカーコーチ	質問2：ドイツ語教師
控え目（謙虚）	控えめな、思慮深い態度
謙虚（謙遜・恭順）	遠慮がち（控え目な・慎重な）
規律（秩序）	よい規律（秩序）
時間的正確さ（時間を守ること）	時間厳守
野心（功名心・名誉欲）* [目標達成への気持ち]	野心（功名心・名誉欲）* [目標達成への気持ち]
学ぶことを喜ぶ	
	とても勤勉
意見などを差し控える（感情などを抑える）	調和（融合）欲求
信頼性（確実性）	信頼できる（頼りになる）
礼儀正しさ（丁寧さ）	礼儀正しい
丁重（敬意のこもった）	
誠実（公正・忠誠）	
親切（好意）	

行動 心構え 技能

実性)],そして「礼儀正しさ(丁寧さ)」といった類のワードが挙げられた。

本項の回答には、特に新規性はなく、ごく一般的に評される日本人の特徴と同様であったといえる。ただ一点、「野心(功名心・名誉欲)」という回答については、ドイツの地で、困難や種々多様な壁を前にしてもなお、その地・その社会への順応を果たす、あるいは順応に向けて前進するために、その根幹をなすパーソナリティになりうるのではないだろうか。

6.3 ドイツにおいて持っているべき日本人サッカーコーチの性質(特性) / 能力

回答を表5にまとめた。キーワード全てに関する回答があった。また、キーワードに当てはまらないと判断した回答があった。それは、教師が回答した「権威(威信)」であった。下記に追加インタビューでの内容を記す。

「権威(威信)」とは具体的に？

『単に、選手があなた[コーチ]をコーチとしてより[自分たちより]高い[ポジションにいる]人物だと認める(承認する・尊重する)ということ。』

コーチに対して？

『そのとおり。あなた[コーチ]がコーチであるということ、言ったことが重要で正しいということ、という承認(尊重)。あなたは知っているでしょう、学校でも同様であることを。教師が「権威(威信)」を持っていれば、子供たちは静か(平穏・じっとしている)であり、[必要なこと・教師がいったこと]すべてを行う。持っていなければ…』

主体者は、現地人との会話において、「ド

イツでは最初に強く指導する必要がある、最初が肝心、まずは強く・強く・強く[要求する・指示を出す].」といったアドバイスに類似したコメントを複数回聞いている。また、サッカーコーチ活動においても、「言葉で言って聞かせる、諭す」といった方法より、「まずは罰を定める/与える(方がよい).」というコメントも複数回聞いている(時にそういった行動が求められた)。あるいは、前項で記した控え目・謙虚・遠慮がち(謙遜・恭順・慎重な・思慮深い態度)」という日本人の特徴的に捉えられているパーソナリティを鑑み、日本人コーチがドイツの現地サッカー社会でコーチング活動を実践する場合に、「権威(威信)」を強く意識する必要があると捉えられた回答であるとも考えられる。

「技能」に関して、3人(コーチ・教師)の回答に「ドイツ語の能力」に関する回答があった。またその中には、「日常話し言葉を理解できること」「選手同士が互いに話していることを理解できること」があった。これは、ドイツ語習得コース受講などで得られるスキルではなく、実践の蓄積で得られるコミュニケーション能力の一つである。また、特定のジェネレーションで使用される言葉やスラングといった類のもの、文化や宗教といった個人や団体により様々な違いのある背景的要素から推察される現地で行ってはいけない動作などの理解についても、回答にはなかったがこれらに関連して必要になる。「技能」についてはもう一つ、「専門知識」についての回答が、3人(コーチ・教師)に挙げられていた。

「行動」に関わる回答は2つ、「人に対する興味」「文化に対する興味(特にサッカー文化)」があり、同一のコーチが回答していた。この回答は、6.1での「(自身の)興味を示すこと」「質問すること」という回答とも重複し、興味深い見解が得られると判断したため、回答者への追加インタビューの内容を下記に記す。

『一般的に「興味を示すこと」「質問すること」は大事。何故なら、唯一そこ〔その行動〕から、人々や文化から、良い成功を取めることができるから。何か自分自身が知らないものを見たとき、自分の国と違うように知っている〔認識している〕もの、または知らないものをみたとき、またはシンプルに何かを見てそれに関して質問をしない場合、それらについてのすべてを学ぶことはできない〔ほんの一部分しか学ぶことはできない〕。私は、新しいことを見たとき、または、自分が知らない違うことを見たとき、どのようにそれらを知るかがとても重要と考えている、そしてまた、「何故ここ、例えばドイツではそうなのか、何故そうするのか」を質問することが大事と考えている、それによって人はより早く〔物事を〕理解することができる。』

つまり、〔この考えは〕、主体者〔について〕または回答者がすでに知っている知人〔についての事〕からではなく、一般的なことに対しての考え方〔ですか〕。

『一般的〔な考え方〕。』

もし興味があること〔があれば〕、知らないこと〔があれば〕、シンプルに質問すること…。

『はい。違う国にいるとき、たびたび違う事柄〔場合〕がある、自分自身が知っている事と、自分自身の国や文化と。なにか一つ〔の事柄〕見たとき、その興味から、「何故それはそうなのか」を質問する、そうすると知り、学びより良く知ることができる。これは順応できることに〔おいて〕重要。』

また、最初の回答の中の記述に下記の記述もあった。

『とにかく1回実施してみることに、そして社会的な生活に参加したとき〔に〕、どのように振舞うかを最も速く学ぶ』

これらの回答からは、国際社会で活躍するために必要なコミュニケーション能力は、単なるコミュニケーションツールとしての外国語のスキルだけではない、能動的に活動すべきその理由を垣間見ることができる。さらには、海外の地に降り立った最初の段階において、その世界に順応するために必要不可欠なステップともいえる示唆が含まれている。

「心構え・パーソナリティ」に関する回答では、コーチ・教師それぞれ1名が、ここでも「オープンであること」と回答している。ここで回答した教師は、6.1で「オープンであること」と回答したものと同一人物であるため、自由回答式によって得られたコメントを記載し、その見解を記しておく。

『〔ドイツ語の能力に関する記述の後に…〕それに加えて、自信と新しいことにオープンであるべきだ。私は、ドイツに住んでいる人は誰もが自分の意見を言う、と考える。私は、日本の人は少し違うように見える（見る）、と推測する。』

人や文化に対して「オープンである」ことに加えて、自身の考えや意見を「オープンに晒す」、つまり主張する、意見を言うことがドイツで順応するために必要なことであり、現地人と日本人（日本にいる人と表現）とはこの点について違うと明確に述べている。協力を得た教師には30名以上の日本人の知人がいるため、日本人と長年付き合い、観察したうえでの信頼性のある意見と受け取ることができる。

その他、コーチ1名が「日本人の〔もつ〕メンタリティ」と回答している。補足すると、『私の考えでは、日本人のメンタリティは、

良いコーチであるための者が必要とするすべてを持って（きて）いる』が回答の全文である。このコーチが持つ日本人の知人は1名、つまり主体者のみであることも付け加え、一般化してとらえることができない回答であることも考慮しておかなければならない。

また、特筆すべき回答が、「自分自身の考え（理念）を固く持つておくための自信」「自分自身の考え（理念）を説明する〔伝える〕ための自信」「自信」「実施する〔実施させ抜く〕強さ」「主張〔実施させ抜く力〕」「サッカーについての多くの知識をわかりやすく説明する〔伝える〕ことができること」という回答が、3名（コーチ・教師）の回答にあった。著者は「自信」というキーワードでまとめることも考えたが、それぞれの回答に、海外で日本人サッカーコーチが順応するための現地人の見解についての興味深い内容が含まれていると判断しそのまま記載した。さらに、「実施させ抜く力」の回答について興味深い見解が得られると判断したため、教師への追加インタビューの内容を下記に記す。

「実施させ抜く力」とは具体的に？何かに対して？誰かに対して？

『「実施させ抜く力」、例えば、自分のチームにおいて必要になる。もしコーチが何かを言ったとき、選手がすぐに受け入れない（承諾しない）、または、選手が“何故私が今それをしなければいけないのか？”と言う〔ことがある〕。その時、コーチとして「実施させ抜く力」を持っていることが重要、つまり、人はある事柄を「実施させ抜く」ことができること、つまりそれらのことを「やり遂げる」ことができること。……〔トレーニングにおいて〕“君たちは全て行わなければいけない”〔と示すこと〕。“君たちががしたい（しようとする）、あるいは〔したく〕ない（〔しようとし〕ない）に関わらず”、“君たちが意味があると思う、思わ

ないは、どうでもよい、君たちは、行わなければならない”』

それは、選手・チームに対して？

『すべてに対して、本来は。しかし、今は、私は、主にはチームに対して〔の意図で考えていた〕。』

コーチとして“〔その〕人が何をしたいか”について？

『そのとおり。あなたの〔コーチの〕考えを実施させ抜くことができること。“今日、私〔コーチ〕は、こう試してみたい〔トレーニングしたい〕”〔と示す必要がある〕。』

「実施させ抜く力」という単語には非常に近い意味として、「頑張り通す・発揮し通す」という単語もあり、その関連語には「意見を述べる」「自分の意思を通す」「強調する」といった単語が並ぶ。回答者は、本項最初に述べた、「権威（威信）」と並べて回答している。コーチや教師のテクニックの側面を有し、特に青少年の活動において、ドイツに比べて日本にはより規律があり、オートマチックにコーチや教師に対しての「権威（威信）」が既にあるため、ドイツにおいてはこの点において留意する必要があるだろう。ただ、育成年代の指導において判断力に関わる力を育成するという考え方に日独違いはないだろうことも付け加えておきたい。始まりの場において、日独で対象者の反応や（よく）起こりうる行動に相違点があるのだ。

前項で回答者全員（コーチ・教師）が記した「控え目・謙虚・遠慮がち（謙遜・恭順・慎重な・思慮深い態度）」というキーワードから表出しやすい行動を想像すると興味深い。対して、国際社会で活躍する人材となるためにも、本項で示された、「実施させ抜く力」、そして「自分自身の考え（理念）を固

く持っておくための自信」「自分自身の考え(理念)を説明する[伝える]ための自信」「サッカーについての多くの知識をわかりやすく説明する[伝える]ことができること」については、身に着けるべき重要な能力と言え、海外であるポストを得るためにも重要なのではないか。

そのほか、キーワードに当てはまらない回答で、教師1名の回答の「選手に対する[人の立場などに対する]理解」があった。パーソナリティの要素についての理解なのか、ドイツには日本以上に多民族多国籍な社会があり、また地域ごとにその文化的な背景が異なるといった(例えばあるエリアではある一定の文化的あるいは国籍的背景をもつ同様の人々が居住している、社会を形成しているなど)ことについて理解なのか、サッカー選手として個々がもつサッカーの志向や特徴に関する理解なのか、ここでは限定することが困難であったため、3つのキーワードには分類しないこととした。しかし、少なくとも主体

者が現地で実践した場面・環境において、そのどれもが当てはまることであると推測できる。

6.4 ドイツにおいて日本人サッカーコーチが持っているべきサッカーに関する知識

回答を表6にまとめた。「技能」において、コーチ・教師それぞれ1名が、「それ以上でもそれ以下でもない[日本人とドイツ人で同じ]」という回答と、「トレーニングメソッドに精通していること」と回答している。「それ以上でもそれ以下でもない[日本人とドイツ人で同じ]」とのコーチ1名の回答については、興味深い見解が得られると判断したため、回答者への追加インタビューの内容を下記に記す。

『私は[次のように]思う、それは全く同じ、「ドイツ人のコーチがどのように日本で仕事をするか」と、「日本人のコーチが日本

表5. ドイツにおいて持っているべき日本人サッカーコーチの性質(特性)/能力(質問3)

質問3: サッカーコーチ	質問3: ドイツ語教師
ドイツ語を話す	ドイツ語を上手に話せること
ドイツ語を理解する	ドイツ語の日常話し言葉を理解できること
	選手同士が互いに話していることを理解できること
サッカーについての多くの知識	良い専門知識
	専門知識
自分自身の考え(理念)を固く持っておくための自信	自信
自分自身の考え(理念)を説明する[伝える]ための自信	主張[実施させぬく力]
サッカーについての多くの知識をわかりやすく説明する[伝える]ことができること	実施する[実施させ抜く]強さ
心が開かれていること(率直さ)	オープンであること
	選手に対する理解
人に対する興味	
文化に対する興味(特にサッカー文化)	
日本人のメンタリティ(気質・物の見方)	
	権威(威信)

行動 心構え 技能

でどのように仕事をするのか],あるいは、「ドイツ人のコーチがドイツで[仕事を]するのか」と、追加の特別な知識をもつ必要はない。コーチはただ[とにかく]知識を持つ必要がある、ただ[とにかく]良いサッカーコーチであるための知識を持つ、[その]人が今、日本にしようとドイツにしようとオランダ、スペインにしようと。私は、日本人がドイツで日本に[いる]時とは違う(別の)知識を持つ必要があるとは思わない、と感じる』

この言葉からは、日本サッカーへのリスクと同時に、サッカーという競技においては、大切なことは国ごとで変わらない、という見解が読み取れる。海外で順応するために、日本国内で仮に何かを準備するのであれば、ただ単純にサッカーコーチとしての能力を向上させることに注力すればよい。無論、そこには実践経験が多分に含まれることを付け加

えておきたい。ここでは「知識」についての回答だが、既に述べたように、コーチには実践力が求められるからである。

そのほかでは、コーチ1名の「テクニックとタクティック(戦術)」について、事前にクラブの責任(権限)を持った管理者と話し合われているべきテーマ(課題・[トレーニングやチーム育成・強化についての]要点)をどのリーグかに応じて、年代とレベルに応じて、区別して(識別して)トレーニングすること」との回答があった。坂尾(2017)は、ドイツにおけるリーグ戦システムについてまとめている。ドイツでは、年代およびレベル毎に確かなピラミッドが形成されている。確かなリーグ戦システムが構築されている事實は、同時に各クラブの育成システムの仕組みにも反映される。その実情が上記の回答となって表れているのである。その他に、ドイツの一般的なサッカー文化に関する回答も挙げられていた。

表6. ドイツにおいて日本人サッカーコーチが持っているべきサッカーに関する知識(質問4)

質問4：サッカーコーチ	質問4：ドイツ語教師
それ以上でもそれ以下でもない[日本人とドイツ人で同じ]	トレーニングメソッドに精通していること
テクニックとタクティック(戦術)について事前にクラブの責任(権限)を持った管理者と話し合われているべきテーマ(課題・要点)をどのリーグ化に応じて、年代とレベルに応じて、区別して(識別して)トレーニングすること	
	ブンデスリーガや歴史的な成功を取めたドイツのチームと、ドイツのクラブシステムについての知識、
	最も重要なクラブとその選手を知っていること
	最も知られているドイツ選手やドイツのコーチについて知っていること
	居住場所のレギオナルリーグ(地域リーグ)のクラブに精通していること

行動 心構え 技能

6.5 ドイツ語の能力習得について

最後に主体者のドイツ語能力習得過程(表2)とCommon European Framework of Reference for Language(CEFR)(表7)を資料として提示し、主体者の現地での活動を踏まえて論じる。

ドイツのシーズンはカテゴリーによって違いはあるが、リーグ戦に向けたプレシーズンを始まりと表現すると6月、遅くとも8月には開始する。主体者は5月上旬の渡独時点で、ドイツ語の能力は全くないに等しいレベルであった。そしてシーズンスタート時期には

A1/A2 レベルであり、リーグ戦開幕直前に A2 コース受講が終了した。コーチ活動の質を担保するために、あるレベルの語学力は必要だ。6.1 において、教師は「ドイツ語の基本的な知識“レベル B1 まで”」と具体的に述べている。B1 レベルとは、表 7 にある通り、仕事・学校・余暇などにおいて主要点を理解でき、個人的な関心のある話題に筋の通ったテキストを作ることができ、描写ができ、意見や計画について理由や原因とともに述べることができる(要抜粋)、とある。主体者の語学スキルという点では能力が達していたとは言えない。主体者は活動開始時期に、語学スキルの脆弱さを何らかの要素で

補ったことが考えられ、実践現場で発揮が求められる要素(6.1～6.4での回答)を実行したことで、そのポストの取得・継続を図れたのではないだろうか。

渡独の目的は語学習得ではないため、表 2 のように、コース受講頻度や検定受験の時期が一定ではない。コーチ活動は単にチームや選手とともに活動する場だけではなく、周辺のサッカー事情を見聞したり、国内外男女問わず様々なレベルのサッカーの現状を観察・分析・自分なりに咀嚼することもその一環である。ドイツ語コース受講に時間を割けるかは時期によって異なる。一方で、「ドイツ語の能力」習得の場は、コース受講以外にも多

表 7. Common Reference Levels_global scale (Common European Framework of Reference for Languages より引用, 2021/09/09 アクセス)

Table 1. Common Reference Levels: global scale

Proficient User	C2	Can understand with ease virtually everything heard or read. Can summarise information from different spoken and written sources, reconstructing arguments and accounts in a coherent presentation. Can express him/herself spontaneously, very fluently and precisely, differentiating finer shades of meaning even in more complex situations.
	C1	Can understand a wide range of demanding, longer texts, and recognise implicit meaning. Can express him/herself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. Can use language flexibly and effectively for social, academic and professional purposes. Can produce clear, well-structured, detailed text on complex subjects, showing controlled use of organisational patterns, connectors and cohesive devices.
Independent User	B2	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialisation. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.
	B1	Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly give reasons and explanations for opinions and plans.
Basic User	A2	Can understand sentences and frequently used expressions related to areas of most immediate relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local geography, employment). Can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar and routine matters. Can describe in simple terms aspects of his/her background, immediate environment and matters in areas of immediate need.
	A1	Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type. Can introduce him/herself and others and can ask and answer questions about personal details such as where he/she lives, people he/she knows and things he/she has. Can interact in a simple way provided the other person talks slowly and clearly and is prepared to help.

くあり、実践で使えるスキルは実はコース受講以外の場面に多分に含まれ、それにより実践力が鍛えられる側面もある。実践現場では、語学のスキル獲得の先にある能力が求められる。それは、国際社会で活躍する人材となるための、ディスカッションやディベート、主張する力、妥協点を定める力といったコミュニケーション能力である。そして、それら獲得のための実践例として、主体者が採用したなるべく現地人社会の中で生活・活動し、海外で起こりえる課題や問題点をできるだけ日本人に頼らず課題解決するよう心掛ける、という手法が奏功したのではないだろうか。さらに、コミュニケーション能力とは、一に語学の基本的なスキルの獲得、二に実践現場での使用、というように順番に育成されるものではなく、両者を同時に進行しながら育成していくことが求められるのではないだろうか。とくに後者において、日本とそれ以外の国々では大きな差があるのではないだろうか。海外に順応するという観点においては、実践現場においてコミュニケーション能力を発揮するという点は、非常に基礎的であり、しかし必要不可欠な要素であると考えられる。

7. まとめ

本研究は、ドイツにおける日本人サッカーコーチの活動事例を活用して、現地のサッカーコーチ及びドイツ語教師の客観的な視点を質的データとして収集することにより、スポーツ分野において海外の現場で順応する人材の資質・能力に関して考察し、基礎的資料を蓄積することを目的とした。回答から、「ドイツ語の能力」「オープンであること」といった項目の他に、「質問すること」「実施させ抜く力」「権威（威信）」といった項目が挙げられた。「サッカーについての多くの知識をわかりやすく説明する〔伝える〕ことができること」「自分自身の考え（理念）を説明する〔伝える〕ための自信」とあるような、外国語スキルという単独の能力にとどまらず、海外で

順応するための幅広いコミュニケーション能力に関わる事柄についての示唆も得ることができた。

本件では、「広く日本人全体の特性について」を前提に質問し、回答を求めた。結果および考察の内容は、アンケート回答者の知り得る日本人が限定的であることが影響している可能性、そして、スポーツ分野において海外の現場で順応する人材の資質・能力について示唆された内容は、特定されたある場面（例えばサッカーコーチの活動現場）に関するもののみならず、コミュニティや日常生活に関すること、その両方に共通する点があった。

今後は主体者のコーチング事例を対象にサッカーコーチとしての具体的能力について調査を進め、実践知の蓄積を図りたい。

注

注1) ここで使用する「現地人」とは、国籍や生まれ育ち、生活母体の国や地域を特定せず、現地の日本人以外の人々を指している。いわゆる日本人にとっての外国人として、総称して使用。

注2) JOC スポーツ指導者海外研修事業における研修コーチ（無給）という立場での活動だったが、現地滞在のためのビザは「就労ビザ」が発行された。ドイツ国内において、通常、同様の活動は有給の活動であることが理由であった。

注3) ここでは、主体者のドイツ在住時の心構えとして述べており、現地日本人に全く支援を得なかったわけではないが、必要最低限にとどめた。

引用文献

- 會田 宏 (2014) コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方。コーチング学研究, 27 (2) : 63-167.
- 會田 宏・舟木浩斗 (2011) ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究—大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手かがりに—。

- コーチング学研究, 24 (2) : 107-118.
- 青山清英 (2017) スポーツ指導者養成機関のスポーツ指導者教育における理論知と実践知. 教師教育と実践知, 2 : 51-58.
- 朝岡正雄 (2011) ドイツ語圏における発展過程から見たコーチング学の今日的課題. 体育学研究, 56 : 1-18.
- COUNCIL OF EUROPE. <https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/home> (2021/09/09 アクセス)
- 古屋朝映子・會田 宏・松浦 綾・長谷川聖修 (2020) 指導者からみた親子体操教室における参加者の「関係の変化」—指導者の「対話による省察」を手掛かりとして. コーチング学研究, 34 (1) : 15-33.
- グローバル人材育成推進会議 (2011) グローバル人材育成推進会議中間まとめ (案). <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/dai2/siryoul.pdf> (2017/06/22 アクセス)
- 金野達也・齋藤さわ子 (2019) 元プロサッカー選手がサッカー関連以外の仕事をするまでの作業的移行—仕事間における意味と機能のつながりに焦点を当てて—. The Journal of Japan Academy of Health Sciences, 22 (3) : 119-134.
- 公益財団法人日本オリンピック委員会「JOC について」. <https://www.joc.or.jp/about/> (2021/09/09 アクセス)
- 公益財団法人日本オリンピック委員「スポーツ指導者海外研修事業」. https://www.joc.or.jp/training/foreign_trainee/ (2021/09/09 アクセス)
- 公益財団法人日本サッカー協会「国際交流・アジア貢献事業」. https://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/dispatch_member/ (2021/09/09 アクセス)
- 松田繁樹・出村慎一・水沢利栄・石原孝尚・館 俊樹・高橋憲司 (2013) サッカー指導者の指導力を評価する評価票の作成～質問項目の検討～. 体育測定評価研究, 12 (0) : 25-37.
- 村木征人 (2016) コーチング学研究の小史と展望. コーチング学研究, 29 : 43-55.
- 中川 昭 (2011) 私の考えるコーチング論：エリートアスリートのコーチング. コーチング学研究, 24 (2) : 89-93.
- 中道莉緒 (2012) 女性車いすバスケットボール選手の生活観の国際比較. 体育学研究, 57 : 285-295.
- 中道莉緒 (2020) 女性車いすバスケットボール選手の生活観：学生アスリートの語りから. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 17 : 65-77.
- 令和2年度 文部科学白書. 文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab202001/1420041_00009.htm (2021/9/1 アクセス)
- 令和3年版 子供・若者白書 (全体版). 内閣府 https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r03honpen/pdf_index.html (2021/9/1 アクセス)
- 坂尾美穂 (2017) 平成26年度短期派遣 (サッカー). スポーツ指導者海外研修事業 平成27年度帰国者報告書, 125-143.
- 島崎崇史・吉川政夫 (2012) コーチのノンバーバルコミュニケーションに関する研究：コミュニケーション能力、およびコーチング評価との関連性. 体育学研究, 57 : 427-447.
- 鈴木茂廣・若吉浩二・坂田勇夫 (2000) 海外遠征が高校水球選手の心理的側面に及ぼす影響—地域大会レベルのチームを対象として—. スポーツ方法学研究, 13 (1) : 83-91.
- 内山治樹 (1990) コーチの資質に関する一考察—競技スポーツにおける倫理的・道徳的諸問題解明の端緒として—. スポーツ教育学研究, 10 (1) : 13-24.
- 山本正嘉 (2018) 体育・スポーツの実践研究はどうあるべきか. 福永哲夫・山本正嘉編 体育・スポーツ分野における実践研究の考え方と論文の書き方. 市村出版：東京 8-30.